北朝と隱逸

池田恭哉

はじめに

『北史』と『南史』では、隱逸傳に列せられる人物の數に大きな差がある。『南史』は實に四十六人が列せられるのに對し、『北史』はわずか七人が列せられるのみなのである。個別の王朝の正史を見ると、南朝では『陳書』を除いて『宋書』隱逸傳、『南齊書』高逸傳、『梁書』處士傳がある。一方北朝では、『魏書』逸士傳が立てられるが、それもわずか四人を列するに過ぎず、『北齊書』や『周書』に至っては、隱逸傳に相當する列傳すらない。

こうした南北朝間での相違に關連して、南北兩方の王朝に仕えた顏之推が興味深い發言をしている。彼は『顏氏家訓』終制篇において、自らの一生を總括する形で、自身が本來はすべきでなかったにもかかわらず出仕した理由の一つとして、次のように言うのである。

以北方政敎嚴切、全無隱退者故也。

北方の政治・敎化は嚴肅で切迫しており、全く隱棲する者がいなかったからである。

これは南朝から北朝へと流轉した顏之推の實感がこもった、貴重な言葉である。だが「嚴切な政敎」が具體的にどういったことを指し、また本當にまったく隱棲、隱逸する人物が北朝にいなかったのか、疑問が生じよう。

これまで魏晉南北朝期の隱逸をめぐる研究は、もっぱら南朝を對象とし、北朝の隱逸にはほとんど目を向けてこなかった。(一) 本論考は、顏之推の言葉を出發點に、主に東魏・北齊及び西魏・北周を中心とした北朝の隱逸をめぐる狀況について考察を試みるものである。

一　北朝における政治の「嚴」

顏之推が北朝の政治・敎化を「嚴切」と言ったのは、具體的にどういう事實を指したのか。このことについて、『魏書』楊椿傳の楊椿の言葉を見たい。やっとの思いで致仕を許された楊椿は、行に臨んで子孫に訓戒して言う。

北都時、朝法嚴急。……汝等脫若萬一蒙時主知遇、宜深愼言語、不可輕論人惡也。

都が北都（平城）の頃、朝廷の法制は嚴肅刻急であった。……

お前たちがもし萬一にも時の君主の恩遇を蒙れば、ぜひとも言葉をしっかり愼み、輕率に人の惡いところを論じてはならないぞ。

また『魏書』高允傳では、北魏初めの嚴しい法制の中で、高允が長年にわたって一度も處罰されなかったことを實に珍しいこととして語っている。

魏初法嚴、朝士多見杖罰。允歷事五帝、出入三省、五十餘年、初無譴咎。

魏初の法制は嚴しく、朝士たちは多く杖刑に處された。高允は歷代五人の皇帝に仕え、三省に出入りすること五十餘年、一度もお咎めを被ることがなかった。

このように、洛陽遷都以前の北魏から、北朝の法制とその適用は嚴しく、楊椿が子孫に輕率な發言を愼むよう特に訓示するほどに、當時の朝廷には張りつめた空氣があった。

こうした張りつめた空氣は、顏之推の生きた時代にも續き、『北齊書』や『周書』、さらに北齊・北周の興亡の顚末を詳細に綴った盧思道の北齊・北周「興亡論」[一]には、兩朝の皇帝とその朝廷の「嚴」なる樣が散見される。

見文宣政令轉嚴、求出、除趙州刺史、竟不獲述職、猶爲弄臣。（『北齊書』徐之才傳）

文宣帝の政策法令がどんどん嚴しくなるのを見て、（徐之才は）外任を申し出、趙州刺史に除せられたが、とうとう實際にその職に就くことができず、そのまま側近の臣に甘んじた。

但政苛碎、暗於聽受、降年不永、期歲而崩。（「北齊興亡論」、孝昭帝）

ただ（孝昭帝は）政治が苛酷で細々としており、臣下の言葉に耳を貸さず、壽命は長くはなく、一年して崩御した。

及誅護之後、始親萬機。克己勵精、聽覽不怠。用法嚴整、多所罪殺。號令懇惻、唯屬意於政。羣下畏服、莫不肅然。（『周書』武帝紀）

宇文護が誅された後、（武帝は）自ら政務を執り始めた。私欲を抑え全力を盡くし、政務を怠らなかった。法律の適用はきわめて嚴しく、罪刑に處することが多かった。政令の發布は誠懇痛切で、ひたすら精神を政治に集中した。臣下たちは畏れ服し、誰もが肅然とした。

令行禁止、內外肅然。……軍令肅然、秋毫莫犯。……天性嚴忍、果於殺戮、血流盈前、無廢飲噉。（「北周興亡論」、武帝）

（武帝のときは）政令を發すれば行なわれ禁令を施せば止み、內外は肅然としていた。……軍令は肅然として、少しも犯則する者はなかった。……（武帝は）生まれついての殘忍な性質で、殺戮に果斷で、血が目の前に溢れていても、酒を飲むのをやめはしなかった。

及高祖崩、宣帝嗣位。……運又上疏曰、……帝亦不納、而昏暴滋甚。（『周書』樂運傳）

高祖が崩御して、宣帝が繼位した。……樂運はまた上疏して言った、……帝はまたも聽き入れずに、暗愚ぶり暴力ぶりはいよいよ甚だしくなった。

これらの記事や、北齊・文宣帝が末年は酒浸りで臣下を斬りつけた話[二]などを考えると、政治の面では、法制とその適用の苛酷さに加え、君主による橫暴な專政に恐怖心を覺える臣下、という構圖を顏

之推は「嚴切」と評したと言えるだろう。

そもそも北朝では、皇帝を中心とした中央集權への志向が強かった。次の北周・武帝の言葉は、その志向を象徴する。

（高祖）謂曰、……且近代以來、又有一弊。暫經隸屬、便即禮若君臣。此乃亂代之權宜、非經國之治術。詩云、夙夜匪解、以事一人。一人者、止據天子耳。（『周書』齊煬王憲傳）

（高祖）が言った、「……さらに最近になって、またもう一つの弊害がある。暫しの間ある者に隷屬すれば、すぐにその者と君臣關係の如き禮を執る。これは實に亂世における假初めの方策であり、國を治める政治のやり方ではない。『詩』に「朝から晩まで惰ることなく、「一人」にだけお仕えする」とある。「一人」とは、ただ天子に仕えるのみである」と。

二　仕官への壓力――北周・明帝の招隠詩

強い中央集權志向は、致仕にも影響した。老齢のため致仕を強く願い出た北周の于謹や韋孝寛は、武帝に次のように拒まれた。

公若更執謙沖、有司宜斷啟。（『周書』于謹傳）

公が假にさらに謙虚な態度を執っても、有司にはそれを取り次がせない。

往已面申本懷、何煩重請也。（『周書』韋孝寛傳）

先にもう致仕したいとの本心を私に面と向かって口にしたのだから、どうしてわざわざ重ねて（致仕を）請願する必要があろう。

致仕を拒まれた例は、他にも北周・北齊の兩王朝で見出せる。[四] もちろん致仕を求めながら拒まれた事例はいつの世にも存在し、これらを北朝だけの特徴とはできない。だが于謹や韋孝寛への武帝の口調は、當時「官を去ること」が嚴しく拒まれた様を示すであろう。

こうした「官を去る」ことを許さない北朝の姿勢をよく示すものに、出仕を拒む韋夐に贈った北周・明帝の詩がある。『周書』韋夐傳に見えるこの詩は、最初の四句で隠逸についてこう説き起こす。

六爻貞遯世　六爻（易）は世を遁れることを貞しいとし
三辰光少微　三辰は隠者の少微の星[五]を輝かせる
潁陽讓逾遠　潁水にて耳を洗った許由の退讓はますます遠いもの
滄州去不歸　天下の讓渡を辭した滄州の子州支伯は去ってしまって歸らない[六]

續く八句では、隠逸の世界・自然を描寫し、最後は隠者へ思いを馳せる。

香動秋蘭佩　芳香が秋蘭の香りのする佩飾から立ち上がり[七]
風飄蓮葉衣　風が蓮の葉のような衣を翻す
坐石窺仙洞　石に坐して仙人の住み處の様子を窺い
乘槎下釣磯　槎に乘って釣り糸を垂れる磯部へ下る
嶺松千仞直　嶺の松はすらっと真っ直ぐで
巖泉百丈飛　巖の泉は遠くまで水しぶきを飛ばす
聊登平樂觀　暫し平樂觀に登って
遠望首陽薇　遠く首陽山で薇を採る伯夷・叔齊でも見遣ろう

以上のような、具體的な隠逸世界の自然や様子の描寫は、左思や陸機ら南朝の「招隠詩」（『文選』卷二十二）に通じる。だが興味深いのは、この明帝の詩と南朝「招隠詩」が、結びで明白に方向性

を異にすることである。

まず左思と陸機の「招隠詩」の結びを確認しておこう。

躊躇足力煩　世の憂いの中を彷徨するうちに脚力が弱ってしまった

聊欲投吾簪　暫し私の冠を留める簪を外したく思う（左思、其一）

相與觀所尚　隠者とともに自身の是とするところを披瀝し合い

逍遙撰良辰　安閑自在としてよき時節を選ぼう（左思、其二）

富貴苟難圖　富貴とは實に思い通りにならないもの

稅駕從所欲　車を乘り捨てて思うところに從おう（陸機）

このように、南朝「招隠詩」では、結びで作者自身が隠逸に傾斜し、隠逸への憧れと同調が描出されている。

一方の明帝の詩の結びはどうか。

詎能同四隠　まさか商山に隠れ棲んだ四人の隠士のように

來參余萬機　世に出て來て私の政治に參畫してはくれますまい

四隠は所謂「商山四皓」で、秦の暴政から逃れ、漢・高祖の再三の招きにも應じなかった隠士たちとして知られる。だが彼らは、高祖が太子を廢せんとした行爲に忠告すべく、一度だけ世に出て來たことがある（『史記』留侯世家）。注目すべきことに、明帝の詩の結びは、「商山四皓」の隠士としての側面ではなく、世に出て來た事實の方を用いているのである。

そもそも「招隠詩」の本來は、小尾郊一氏がすでに指摘しているように、『楚辭』招隠士序が表明する「隠士を招く」という意圖[八]の下、隠逸世界の苦しさを強調し、隠士を出仕させるべく作られたものであった。それが南朝「招隠詩」に至ると、詩題こそ隠士を招來するかの如くだが、その實は最後まで隠逸への同調であり傾斜である[九]。

また王康琚「反招隠詩」（『文選』巻二十二）には、「小隠隠陵藪、大隠隠朝市（「小隠」は山林に世を避けて隠れ、「大隠」は世間の中に身を置いて隠れる）」の句が見出せる。これは左思や陸機が畫く山林での隠逸ではなく、世に居りながら境地としての隠逸を主張するものだが、自身の思いに從う「自得」の境地を追求する點で、左思や陸機の「招隠詩」と相違しない。その身をどこに置こうとも、隠逸の境地を贊美している點は共通するのである。

さて明帝の詩の結びの二句は、南朝「招隠詩」及び王康琚「反招隠詩」のいずれとも異なった方向性を有していよう。それは韋夐が「自得」の境地に生きることを許容せず、「招隠詩」の本來である隠士・韋夐を政治に參畫させる意圖を、表現の上ではいくらかオブラートに包みながらも、明確に打ち出しているのである。そしてこの事實から、北朝において隠士の存在が許容されにくく、嚴しい仕官への壓力が存したことを讀み取るのは、この詩が皇帝の作であるとしても、決して無理ではないと思われるのである[一〇]。

また「反招隠詩」は、隠逸の境地に贊同しつつも、「招隠詩」の如く山林に身を避ける態度は「小隠」と否定し、世間に居りながら隠逸の境地にあることを「大隠」と肯定する。こうした意識は、仕官しながら精神的に隠逸の境地にある所謂「朝隠」の態度へとつながり得、それは南朝の隠逸の特徴として擧げられる。では仕官して世間に居ることが強く求められた北朝に、「朝隠」は見受けられたのか。

明帝に詩を贈られた韋夐は、度重なる招聘もすべて斷わり、次の

如き生活を送っていた。

所居之宅、枕帶林泉。夐對翫琴書、蕭然自樂。時人號爲居士焉。至有慕其閑素者、或載酒從之、夐亦爲之盡歡、接對忘倦。（『周書』韋夐傳）

住んでいた邸宅は、林泉に接していた。韋夐は林泉に向かって琴や書を樂しみ、悠然と自適した。當時の人々は彼を居士と號した。彼の安閑質素な様を慕う者が、酒を持參して彼に付き從うことがあれば、夐もそれを實に歡び、應對に倦むことがなかった。

韋夐は山水を愛し隠逸の志向を有し、官職にも就かず、彼を慕って集った者の一人だった薛裕は、「韋居士という人は、退いては山や谷に居るでもなく、進んでは朝廷に居るでもない（至如韋居士、退不丘壑、進不市朝）」（『周書』薛端傳附弟裕）と評した。こうした意識で仕官すれば、それは「朝隠」の態度に近づこう。だが北朝でそうした態度は、韋夐の他に、東方朔の陸沉の態度を思慕した樊遜（『北齊書』樊遜傳）、退くにも場所がなく、また仕えるのも逡巡すると言った王晞（『北齊書』王昕傳附弟晞）などにその一端がうかがえる程度で、甚だ少なかったと言えるのである。

そもそも「朝隠」は、自らの生活を支える安定收入、つまり俸祿があって初めて成立し、『顔氏家訓』などが随所で痛烈に批判するように、南朝士大夫の生活は俸祿に頼りきっていた。つまり南朝士大夫にとっては、山林で辛い生活を送らずとも自得し得る「朝隠」が、最も適していたのである。だが北朝では、俸祿が支拂われない時期が長く、また減俸も度々實施された。[二二] 彼らには朝隠、すなわち安定した俸祿に頼って精神の充足を追求するような隠逸は、困難だったのである。

三　隠逸の督責――『魏書』逸士傳序

北朝では隠士に仕官への壓力が加えられ、また仕官して「朝隠」の態度を取ることも難しかった。續いてより廣く、北朝が隠逸をどう位置づけていたのか、『魏書』逸士傳序に着目して考察したい。

序は、まず仕官と隠逸の間には長い歴史があると言い、續いて伯夷・叔齊と華士・狂矞という二組の隠者を擧げて、前者が隠逸しながら爲政者に咎められず、後者が隠逸を理由に殺害されたのはなぜか、と設問する。

蓋兼濟獨善、顯晦之殊、其事不同、由來久矣。昔夷・齊獲全於周武、華・矞不容於太公、何哉。

思うに「併せて世も救う」ことと「自身の修養に徹する」ことは（『孟子』盡心上）、仕官と隠逸の相違は、そのあり方が同じではなく、來歴は古い。むかし伯夷・叔齊が周の武王に殺害されることなく、華士・狂矞が太公望に容れられず殺害されたのは、どうしてか。[二三]

そして序はその問いに、次のように解答する。

求其心者、許以激貪之用、督其迹者、以爲束教之風。

その隠逸の心情を汲み取ったのは、貪欲の風を抑制するという効用のために許容し、その隠逸の行動を督責したのは、それを名教による管理という風教としたのである。

「貪欲の風の抑制」という隠逸の効用は、『孟子』萬章下及び盡心下「伯夷の風聲を耳にすれば、頑迷貪欲の人間も廉潔になり、軟

弱無能の人間も強い決意を起こす（聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志）」に始まり、多くの正史が隠逸者のための傳の序で述べる。その一方で、『中外日報』社説「隠者に厳しい時代」[二三]がすでに言及するように、爲政者が隠者の行動を風教による引き締めとして督責することを容認する發想は、他の正史の隠逸者のための傳の序には見られず、實に異例と言えるのである。

序は「しかし世を遁れて歸らない人間は、いつの時代にもいた（而肥遁不反、代有人矣）」と續け、彼らが「情は得失を無きものにし、懐いは憂いを忘れ去る（夷情得喪、忘懐累有）」境地にあったことを述べた上で、隠逸の有する價値をこう評する。

比夫邁德弘道、匡俗庇民、可得而小、不可得而忽也。

かの德を打ち立て道を押し廣め、風俗を匡正して民衆を庇護することに比すれば、意義が劣るとは言っても、忽せにしてはならないものである。

隠逸の意義を十全に評價するのではなく、それを積極的に世や人民のための政治に關わる態度と比較し、そうした態度の方がより意義を有していると認定した上で、それでも隠逸に無視できない面があると述べる。例えば『宋書』隠逸傳序は、隠逸にランク差を設けたが、それが在るべき隠逸の意義の主張のためだった點は揺るがない[二四]。隠逸の意義を述べるべき傳の序で、このように隠逸を相對的かつ低く評價するのは、やはり實に異例であろう。つまり北朝では、あくまで實際に政治に參畫することが隠逸よりも重要視され、隠逸を「教化」の名の下に厳しく制限する風があったことが看取し得るのである。

確かに『魏書』逸士傳序は、『北史』隠逸傳序で補ったものとされる。だが例えば『南史』隠逸傳序が『南齊書』高逸傳序をほぼそのまま襲うように、『北史』隠逸傳序に北朝當時の何らかのソースがあった可能性は十分あろう。そしてそれを以て現行の『魏書』逸士傳序が補われているのであれば、ここまで見た『魏書』逸士傳序に、北朝當時の隠逸觀が反映されていると言えるのではないか。

先に檢討した明帝の詩が意味するところも加味して考えるならば、北朝では常に仕官して王朝に奉じることが強く要求され、そこに隠逸を許容する餘地は少なく、隠逸すらも王朝による政治の管理下にあったのである。

こうして見ると、まったく顔之推の言の如く、北朝の政治・教化は厳切で、官を去るという選擇肢を取りにくい狀況にあったと考えられるのである。

四、北朝における「忠」と「孝」

ここまで、北朝における政治權力の側からの、積極的に政治に關わることの要求と、それから逃れようとする士人への壓力を確認した。ではそうした壓力下に生きた士人たちは、どういった意識でそれに對峙したのか。

そもそも仕官から離れることは、「公」の世界から「私」の世界へと自らの生の立脚點を移すことを意味する。するとそこからは、王朝への「忠」と家への「孝」のどちらを優先するか、という問題が生じる。この問題をめぐっては古來から盛んな議論があり、南朝については、すでに唐長孺氏「魏晉南朝的君父先後論」[二五]が、南朝では基本的に「孝」が「忠」に優先されたことを論證しており、筆者

もそれに同意する。だが唐氏は北朝には何ら言及しないため、北朝においては南朝に反して「忠」が「孝」に優先されたことを示そうと思う。

『北齊書』からは、東魏・北齊において王朝への忠が示された例を幾例か拾うことができる。[二六] それらの中で注目したいのは、仕える王朝と自らの家とが對置され、王朝に忠を盡くすことが選擇されているという事實である。例えば世宗を庇って死んだ陳元康は、詔で次のように稱揚される。

進忠補過、亡家徇國。(『北齊書』陳元康傳)

忠義を進めて過ちを補い、家を亡ぼして國に殉じた。

これは「詔」という支配者側の視點に立つもので、自らの家を犠牲に王朝への忠を盡くしたことを顯彰するのは當然かもしれない。だが被支配者自身も、王朝への忠を自らの家に優先させる意識を表明する。北周と北齊の戰いで、降伏しない北齊・傅伏に對して、北周が彼の息子と韋孝寛を説得に遣わしたところ、傅伏は韋孝寛に對して次のように言って、自らの息子を批難したのである。

事君、有死無貳。此兒爲臣不能竭忠、爲子不能盡孝、人所讎疾。願即斬之、以號令天下。(『北齊書』傅伏傳)

君主に仕えては、殉死はしても二君には仕えない。こやつは臣下として忠義を竭くせず、子息として孝行を盡くせず、人々が恨めしく思うものだ。どうかすぐにこやつを斬って、それを天下に號令してくれ。

西魏・北周でも、王朝への忠の心は見出される。例えば裴寛（字長寛）は、東魏に捕えられて高澄に見える。裴寛の立派さを悟った高澄は、彼を味方にしようと口説くが、裴寛は脱出して西魏に歸還し、宇文泰に再見する。その裴寛を宇文泰はこう稱賛するのである。

裴長寛爲高澄如此厚遇、乃能冒死歸我。雖古之竹帛所載、何以加之。(『周書』裴寛傳)

裴長寛は高澄にかくも厚遇されたのに、何と死を冒してまで私の下に歸って來てくれた。古の竹帛に記載された事であっても、これ以上の事があろうか。

この裴寛の例が象徴的に示すように、東魏・北齊との凄まじい攻防があったこの時代、二君には仕えないという態度によって、自身の仕える王朝への忠が示されたのである。[二七]

そして、先ほど東魏・北齊に見られた「國への忠」と「家への孝」という對の構圖は、西魏・北周においてはより明確となる。

及孝武西遷、事起倉卒、信單騎及之於瀍澗。孝武歎曰、武衛遂能辭父母、捐妻子、遠來從我。世亂識貞良、豈虛言哉。……東魏又遣其將高敖曹・侯景等率衆奄至。信以衆寡不敵、遂率麾下奔梁。居三載、梁武帝方始許信還北。信父母既在山東、梁武帝問信所往、信答以事君無二。梁武帝深義之、禮送甚厚。大統三年秋、至長安。自以虧損國威、上書謝罪。(『周書』獨孤信傳)

孝武帝の西遷に及び、事態は急に起こったため、獨孤信は單騎で瀍澗に行った。孝武帝は感歎して言った、「武衛將軍・信はすぐ父母の下を辭去し、妻子を棄てて、はるばる私に從ってくれた。亂世にこそ素晴らしい貞節の存在を知るとは、何と虛言でないことか」と。……東魏はまた將軍の高敖曹・侯景らに群衆を率いて速やかに向かわせた。信は兵數が少なく敵わなかったために、そのまま軍を率いて梁に奔った。梁に三年居て、梁・武帝は初めて信に北へ戻ることを許可した。信の父母は山東

にいたため、梁・武帝が信の歸還する先を問うと、信は二君に仕えることはないと答えた。梁・武帝は甚く彼の忠義を認め、實に鄭重に送り歸した。大統三年の秋、長安に戻った。自ら國の威信を損なったとして、上書し謝罪した。

及帝入關、事起倉卒、辯不及至家、單馬而從。或問辯曰、得辭家不。辯曰、門外之治、以義斷恩(一八)、復何辭也。……趙青雀之亂、魏太子出居渭北。辯時隨從、亦不告家人。其執志敢決、皆此類也。(『周書』盧辯傳)

孝武帝が關中に入るに及び、事態は急に起こったので、盧辯は家に戻る暇がなく、單騎で帝に從った。ある人が辯に「家を辭去できましたか」と問うた。辯は言った、「家の外の事柄については、忠義により恩義を斷絶するもの、どうして辭去などしましょうか」と。……趙青雀の亂で、魏の太子は逃げて渭北にいた。辯もそれに隨行し、またも家の者たちに告げなかった。彼の節操を變じない果斷さは、どれもこの類であった。

俄而孝武西遷、俠將行而妻子猶在東郡。滎陽鄭偉謂俠曰、天下方亂、未知烏之所集。何如東就妻子、徐擇木焉。俠曰、忠義之道、庸可忽乎。吾既食人之祿、寧以妻子易圖也。遂從入關。(『周書』裴俠傳)

間もなく孝武帝が西遷し、裴俠は從おうとしたが妻子がなお東側にいた。滎陽の鄭偉が俠に言った、「天下は正に亂れ、烏合の衆はどう落ち着くかわからない。妻子とともに東にいて、ゆっくりと付く側を決めてはどうか」と。俠は言った、「忠義の道は、どうして忽せにしてよかろうか。私は祿を頂戴しているからには、どうして妻子のことで計畫を改めよう」と。そのまま帝に從って關中に入った。

もちろん「忠」と「孝」は、ともに忽せにし得ない有價値な德目であった。だが自らが仕える王朝への「忠」と、自身の家への「孝」という兩德目が衝突した場合、彼らは家族からただ一人離れて自らが仕える王朝に奉じることを厭わなかった。つまり北朝にあっては、「孝」に對し「忠」が優先されたのであった。

こうした意識は、「忠」と「孝」が究極的には相容れないとする認識へとつながる。

遂定入關之策。帝以顯和母老、家累又多、令預爲計。對曰、今日之事、忠孝不可竝立。然臣不密則失身(二九)、安敢預爲私計。帝愴然改容曰、卿即我之王陵也。(『周書』宇文神舉傳)

かくて關中に入るという方策が決定した。北魏・孝武帝は、宇文顯和の母が老齡で、係累もまた多いため、事前に家のための手配をさせた。宇文顯和はそれに應じて、「今日の事態に、忠と孝は並立し得ません。しかし臣下は言行に至らぬ點があれば身を滅ぼすのであり、どうして事前に自分の家のための手配など致しましょう」と言った。帝は肅然と居住まいを正し、「君は朕にとっての王陵だ」と言った。

三年、高敖曹率衆圍逼州城、杜窋爲其鄉導。企拒守旬餘、矢盡援絶、城乃陷焉。企謂敖曹曰、泉企力屈、志不服也。及竇泰被擒、敖曹退走、遂執企而東、以窋爲刺史。企臨發、密誡子元禮・仲遵曰、……且忠孝之道、不可兩全。宜各爲身計、勿相隨寇手。但得汝等致力本朝、吾無餘恨。不得以我在東、遂虧臣節也。爾其勉之。(『周書』泉企傳)

(大統)三年、高敖曹が軍衆を率いて州城を圍み逼り、杜窋が

それを先導した。泉企は十日餘り堅固に守ったが、矢は盡き救援も杜絶え、こうして城は陷落した。企は敖曹に「私は力盡きたが、服從するつもりはない」と言った。竇泰が捕えられ、敖曹が引き揚げるに及び、そのまま企を捕えて東に向い、窑を刺史とした。企は出發に際し、密かに息子の元禮・仲遵を誡めて言った、「……また忠義と孝行の道は、兩方を全うはできない。お前たちはぜひそれぞれに自身で圖り、賊どもの手下にはなるな。ただただお前たちが我らの本朝・西魏のために力を盡くしてくれさえすれば、私に何の悔いもない。私が東に居るからと、臣下としての節義を闕いてはならぬぞ。お前たち、努力するように」と。

邙山之役、大軍不利、宜陽・洛州皆爲東魏守。崤東立義者、咸懷異望、而玄母及弟竝在宜陽。玄以爲忠孝不兩立、及率義徒還關南鎭撫。太祖手書勞之。(『周書』魏玄傳)

邙山の役で、軍は勝利できず、宜陽・洛州はすべて東魏の管轄となった。崤東の義擧する者たちは、誰もが裏切りを謀ったが、魏玄は母と弟がみな宜陽にいた。玄は忠と孝は兩立しないと考え、義兵たちを率いて關南に歸還し、そこを鎭撫した。太祖は手ずから書をしたためて彼を慰勞した。

このように、北朝では「忠」と「孝」は並立し得ないという認識がある程度廣まっていた。そして「忠」と「孝」の一方の選擇を迫られたとき、彼らはやはり「忠」を選擇したのである。

その一方で、東魏・北齊及び西魏・北周と對峙していた南朝では、忠孝が兩立し得ないとする立場は、管見の及ぶ限りではわずか一例しか見出せない。

澄之弟琨之爲竟陵王誕司空主簿。……誕之叛、以爲中兵參軍。辭曰、忠孝不得並。琨之老父在。將安之乎。誕殺之。(『南史』宋宗室及諸王傳上・營浦侯遵考附子澄之)

澄之の弟の琨之は、竟陵王・誕の司空主簿となった。……誕は謀反に際し、彼を中兵參軍にした。彼はそれを辭して言った、「忠と孝は並立し得ません。私には老いた父がおります。父を置いてどこへ行けましょうか」と。誕は彼を殺した。

興味深いことに、「忠」と「孝」は兩立しないと認識しながら、ここではむしろ「孝」を持ち出すことによって「忠」を退けようとする意思が表明されている。ここまで引用してきた人物のうち、魏玄が父の代に梁から北朝へ移り住んだ人物である以外は、みな元來から北朝の人間であったことをも考えれば、ここに南朝と北朝における、「忠」と「孝」の位置づけの相違が十分に窺えるであろう。(一〇)

確かに傅伏は結局北周に仕えたし、『周書』魏玄傳は「崤東の義擧する者たちは、誰もが裏切りを謀った」と言う。また北朝においても、個人の利益のために仕える王朝を裏切った人物は史書に散見される。(一一)そして王朝に忠を盡くす場合でも、それが本心からではなく、あくまで打算であった可能性を、『周書』司馬裔傳の次の記事は示唆する。

十五年、太祖令山東立義諸將等能率衆入關者、竝加重賞。

(大統)十五年、太祖は山東の義擧する武將たちのうち、多勢を率いて關中に入ることのできる者たちに、多くの報償を與えた。

支配者の側からの、義擧して味方してくれる者たちへの報償を狙った義擧もあっただろう。だが司馬裔は、所領の千室を率いて真っ

先に太祖の下に至り、太祖が彼を封じようとしたのを固辭して言ったのである。

　裔固辭曰、立義之士、辭鄉里、捐親戚、遠歸皇化者、皆是誠心内發、豈裔能率之乎。今以封裔、便是賣義士以求榮、非所願也。太祖善而從之。

司馬裔は固辭して言った、「義擧の士が、鄉里を辭去し、親屬たちを棄てて、はるばる君主さまの教化に歸心したのは、誰もが誠心からの自發であり、どうして私が引き連れて來たのでありましょう。いま私を封じようとなさるのは、取りも直さず義擧の士たちを榮譽のために賣り渡すことになり、私の望みではありません」と。太祖はそれを善しとして彼に從った。

こうした彼の發言から、やはり仕える王朝に忠義の心を示す意識が、當時の北朝士人の間でかなり定着していたことが讀み取れよう。

また確認しておきたいのは、これらが決して武勇を好んだ北朝武人のみの意識ではないということである。ここまで引用を重ねてきた人物たちの多くに學問の素養があったことは、彼らの傳を讀めば明白である。

以上のように、北朝では自身の保身よりも奉じる王朝への「忠」を重んじる傾向が根強くあり、ためにそこから去って隱逸する氣持ちが生じにくかったとも言えるのではないか。

五、北朝と山水――祖鴻勲の書簡

北朝では、政治權力から逃れて官を去ることが困難で、かつ「公」の世界に自らの生を奉仕する意識が根強かった。だがそれでもなお、「公」の世界たる官から去ろうとする志向を有する人閒が、北朝において皆無ではなかった。ここからは、北朝の隱逸の具體例を見ていき、その特徴を南朝と比較しながら考察したいと思う。

北朝で隱逸の志向を明確に吐露した人物として、まず北齊・祖鴻勲が擧げられよう。『北齊書』祖鴻勲傳には、彼が北魏の滅亡期に官を去って歸鄉し、なお官に留まる陽休之に隱逸を勸めて送った書簡が載錄されている。

書簡は、家の貧しさと親の老いを歸鄉の理由として擧げ、鄉里の自然の樣子とそこでの充實した暮らしぶりを實に克明に描寫する。そして官界を否定し、そこになおも留まる陽休之に隱逸を勸めてこう言う。

　把臂入林、挂巾垂枝、攜酒登巘、舒席平山、道素志、論舊款、訪丹法、語玄書、斯亦樂矣。何必富貴乎。

　手を取り合い林に入り、頭巾を垂れた枝に掛け、酒を攜え峯に登り、敷物を山の平地に廣げ、平素の懷いを述べ、舊交を論じ、煉丹の術を探り、玄學の書を語る、これも實に樂しいではないですか。富貴だけが樂しみではないのです。

老莊の思想に基づき山水の樂しみの境地に滿足する一方で、官界という俗なる世界と價値を拒む態度は、南朝士大夫が求める隱逸と目立って相違はしない。[二二] またここに描寫される山水は、小尾郊一氏が南朝の影響下にあって特に新しさはないと述べるのが當たっていよう。[二三] しかし自然への憧憬とそこでの暮らしを、「隱逸」として具體的に吐露し描寫したこの書簡は、北朝において非常に稀少な存在と言わなくてはならないのである。

山水は、後漢末あたりまで、當時の政治的な混亂を避ける場とし

て機能してきた。それが魏晉時代に入ると、次第に自由の境地の存する場と見做されるようになり、さらに南朝では、山水の世界が隠逸と密接に結びつき、士大夫たちは積極的に山水に踏み行ってその情景を詩賦に詠じた。つまり山水が、鑑賞と閑居の對象となったのである。[二四]

では北朝において、山水は如何なる位置づけだったのか。北齊・李愍が山林に隠れたことを、彼の傳は次のように傳えている。

孝昌之末、天下兵起、愍潛居林慮山、觀候時變。（『北齊書』李元忠傳附宗人李愍）

孝昌年間の末、天下に兵亂が起こり、李愍は林慮山に潛伏して、時世の變化の様子を窺った。

この李愍のように、戰亂や政治闘爭による混亂が生じた際、北朝には官を去って山林に隠れた人物が多くいた。[二五]だがそれは、あくまで時局判斷のための一時的な潛伏だったのであって、決して隠逸を求めて山林に隠れたのではなかった。その證據に、彼らは混亂の收束とともに世に出て再び出仕した。つまり北朝おける山水は、一時的に危險から身を避けるための場所として、むしろ後漢末あたりまでのような役割を果たしていた面が大きかったと言えるのである。

もちろん北朝における山水が、全面的にそうした位置づけにあったとは言わない。北朝でも、隠逸と山水は切り離せない關係にあった。例えば『北史』隠逸傳に列せられる人物たちの數人は、實際に仕官を拒んで山に入ったし、特に馮亮は山水を愛したと明記される。[二六]また『魏書』逸士傳の李謐には、自然を鑑賞する態度があった。だが逆に言えば、馮亮や李謐ら以外には、隠逸者のための傳においてすら、山水に閑居しそれを鑑賞する態度は見受けられず、その他の傳に至ってはなおさらである。[二七]これは、『南史』隠逸傳に列せられる人物で、山水を愛好したと明記されない人物はほとんどおらず、また隠逸傳以外においても山水の愛好と鑑賞の態度が随所に見受けられる事實とは、大きく相違すると言わざるを得ないだろう。[二八]

こうした北朝における山水の位置づけからすれば、隠逸と山水を結びつけた祖鴻勲の書簡は、非常に稀少な存在である。そして我々は、北朝が隠逸の選擇肢を取りにくい狀況にあったことを知っているからこそ、官を去り、山林に身を置いて隠逸の境地を吐露した祖鴻勲のような人物が北朝にいたことには、留意しなければならないだろう。

六、北朝の知識人における隠逸への志向

いま一つ、北朝の隠逸について興味深いことは、官を去った人間たちの生き方を是認する風潮が、北朝の知識人層において、ある程度の集團性を持った形で形成されていたということである。そのことを、いくつかの實例を見ながら示したい。

まずは北朝の、官を辭して後は死ぬまで仕えなかった人物を三人ほど擧げよう。

公緒沉冥樂道、不關世務、故誓心不仕。……公緒潛居自待、雅好著書、撰典言十卷、又撰質疑五卷・喪服章句一卷・古今略記二十卷・玄子五卷・趙語十三卷、並行於世。（『北齊書』李渾傳附族子公緒）

李公緒は道を樂しむことに沒頭し、社會の實務には關心がなく、そのため出仕しないと心に誓った。……公緒はひっそりと隠居

して自分のことに專念し、平素から著述を愛して典言十卷を撰し、また質疑五卷・喪服章句一卷・古今略記二十卷・玄子五卷・趙語十三卷も撰して、どれも世に通行した。

後還鄉里、閉門不出將三十年、不問生產、不交賓客、專精覃思、無所不通。(『北齊書』馮偉傳)

後に鄉里に戻り、門を閉ざして三十年近く外に出ず、財產を問題にせず、賓客と交流せず、精神を集中して深く思索し、通じないところはなかった。

齊亡後、歸鄉里講經、卒於家。(『北齊書』鮑季詳傳)

北齊が滅亡して後、鄉里に歸って經を講じ、家で亡くなった。

彼らは官を去った後は鄉里に歸り、そこで思索に耽って自らの是とすることに沒頭して生きたと言える。そしてそれは、南朝の隱逸者が自然に踏み行ってそれを鑑賞した風流とは、かなり樣子を異にするであろう。

さて、彼らは極力世間とは沒交涉な生活を送った。だが北朝において、官を去って自らの是とするところを追求する彼らの如き生き方を、學問の素養を持った人物たちが是認し、かつ共有する風潮が存したのである。

先に祖鴻勲の書簡に、隱逸と自然を結びつける思想を見出したが、その書簡の相手・陽休之もまた、隱逸と無關係ではなかった。松岡榮志氏が指摘したように、陽休之は『陶淵明集』を編纂し、自ら陶淵明の詩文を好んで鑑賞した旨を序に表明しているのである。(二九) これは、官を去る祖鴻勲と官に留まる陽休之という、一見相反する者同士の間での書簡が、隱逸の志向を決して拭い去れない知識人の意識という、共通の土壤の上に成立していることを意味するのではないか。より踏み込んで言うならば、祖鴻勲と陽休之はともに北朝第一級の知識人と言ってよいが、彼ら北朝の知識人層の間では、やはり官を去らんとする志向が常に存していたと言えるのである。

次に『北史』隱逸傳の崔廓を見たい。

初爲里佐、屢逢屈辱、於是感激、逃入山中。遂博覽書籍、多所通涉、山東學者皆宗之。

最初は里佐に任じられたが、しばしば屈辱に遭い、そこで發憤して山中に隱れ入った。そのまま書籍をたくさん讀み、多くの分野に通じたので、山東の學者たちは誰もが彼を宗師と仰いだ。

山中に入った崔廓を、山東の學者たちがこぞって宗師と仰いだことは、當時の知識人層に、彼のような官を去ったところで學問に生きる態度を許容し稱賛する意識があったことを意味しよう。

またすでに言及した馮偉は、あたかも人と一切の交流を斷っていたかの如くだが、傳に據れば、彼の下には郡守・縣令から季節ごとの羊や酒、門徒たちからの報酬が届けられた。これらを彼は一切受領しなかったけれども、ここでもまた、彼の官を去って自らの學問に打ち込む態度が敬慕されているのである。

北周では、韋夐とその周邊の行動が目を引く。すでに紹介したように、韋夐は山水を愛し隱逸の志向を有し、彼を慕った者が相當數いたようである。そしてその中の一人としてすでに登場した薛裕が、疾病によりその四十一年の生涯を閉じると、「文章の士たちが數人、彼に誄文を物した(文章之士誄之者數人)」のである。彼の傳のほとんどは、韋夐の生き方を慕った樣で占められ、恐らくこの誄文を物した文章の士たちも、そうした薛裕の認識を評價したものと思われる。そしてそれは、間接的には韋夐のような生き方を是認してい

たことをも意味するのではないだろうか。

さらに言うならば、こうした文人層に支持者を有する韋夐だからこそ、明帝は先に見たような詩を彼に贈ったとも言えよう。つまり韋夐を招聘することで、彼のみならず、それを取り巻き思慕する知識人層をも政治權力の中に取り込もうという明帝の意圖も、あの詩には見出し得るのである。これは、北朝における政治權力による隱逸の管理という視點に連なるであろう。

殘念ながら、以上に紹介した隱逸の志向を有する人物たちの傳は、彼らが隱逸に踏み切った直接的な理由をあまり語ってはくれない。そこには、祖鴻勲と陽休之に共通する陶淵明の影響が端的に示す南朝文化の影響、あるいは崔廓が發憤する要因ともなった北朝が抱えた政治の問題の影響などが、多樣かつ複雜に絡み合っていたであろう。だが北朝においても、官を離れて自らの是とするところを追求する生き方が、主流とまでは言い切れないもの(三〇)、ある程度は知識人階層の中から生まれていたということは確認されるのである。

結び——北朝における隱逸の構圖

北朝においても、祖鴻勲など知識人層を中心に、隱逸を志向した人物は確かにいた。だが南朝に比すればやはり少ない。そして興味深いことに、祖鴻勲は書簡を陽休之に送って隱逸を宣言したにもかかわらず、その書簡に續く彼の傳記に據れば、彼はその文才を買われてであろう、梁からの使者の對應人員に充てられ、官に就いたまま生涯を閉じたのである(三一)。同時代には、他にも祖鴻勲のように官位に就くことを意圖的に拒み、その望みを一度は達成しながら、再三の求めにやむを得ず再び官位に就いた人物がいた(三二)。こうした事實は、すでに確認した嚴切な政治や教化と無關係ではない。北朝では、假に官を去る望みを一度は達成し得ても、やはり常に仕官が求められたのである。

北朝には、確かに隱逸が盛んになりにくい要因が存した。まずは王朝の側からの斷え間ない嚴しい仕官の要求である。また王朝に隱逸者を教化の名の下に管理しようとする意志があり、隱逸を許容する餘地が少なかった。さらに王朝への忠をとかく重要視する意識があった。

こうして見ると、なるほど顏之推の言うように、北朝は政治・教化が嚴切で、仕官した人間にとって隱逸という選擇肢は、それを望んだとしてもかなり取りにくい狀況にあった。これは、北朝と對峙した南朝とは大きな徑庭があったと言わなければならないのである。

以上本稿では、士人と政治世界の關係から、北朝における隱逸の特徵を追ってきた。中國士人の生は、やはり政治世界を中心に營まれたのであり、隱逸とは、政治世界から離れることを指したであろう。だが隱逸ということを考えるとき、政治的な要因の他にも、文化的あるいは宗教的な樣々な要因にも留意する必要がある。今後は、そうした觀點をも視野に入れて南朝と北朝を比較し、その上で北朝の隱逸を位置づけることを課題としたい。

注

(一) 小尾郊一『中國の隱遁思想　陶淵明の心の軌跡』(中央公論社、一九

八八)、神樂岡昌俊『隱逸の思想』(ぺりかん社、二〇〇〇)、王瑤「論希企隱逸之風」(『中古文學史論』、北京大學出版社、一九八六、所收)などが、隱逸の發生とその時代ごとの變遷を詳説している。また特に六朝期の隱逸については、吉川忠夫「序章　六朝士大夫の精神生活」(『六朝精神史研究』、同朋舎、一九八四、所收)、參照。だがいずれも南朝の隱逸を論じるのみで、北朝の隱逸には觸れない。北朝の隱逸は、『中外日報』社説「隱者に嚴しい時代」(二〇〇九年八月四日付)に指摘がある。

(二) 祝尚書『《盧思道集》校注』(巴蜀書社、二〇〇一)による。

(三)『北齊書』高德政傳。

(四) 北周は『周書』寇儁傳、樂遜傳など。北齊は『北齊書』陽斐傳、斛律羨傳、「俄而文宣不豫、斃於麴蘖。儲君繼體、纔歷數旬、近習預權、小人並進。楊公慮有危機、引身移疾、幼主若喪股肱、固相敦勉」(「北齊興亡論」)など。

(五)『晉書』隱逸・謝敷傳「初、月犯少微。少微、一名處士星、占者以隱士當之」。

(六) 子州支伯については『莊子』讓王に見え、滄州との關わりは阮籍・爲鄭沖勸晉王牋「臨滄州而謝支伯、登箕山以揖許由」。

(七)『楚辭』離騷「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩」。

(八)『楚辭』招隱士序「招隱士者、淮南小山之所作也。昔淮南王安、博雅好古、招懷天下俊偉之士。自八公之徒、咸慕其德、而歸其仁、各竭才智、著作篇章、分造辭賦、以類相從。故或稱小山、或稱大山、其義猶詩有小雅・大雅也。小山之徒、閔傷屈原、又怪其文昇天乘雲、役使百神、似若仙者、雖身沈沒、名德顯聞、與隱處山澤無異、故作招隱士之賦、以章其志也」。

(九) 小尾郊一「「招隱」の詩」(『中國文學に現われた自然と自然觀』、岩波書店、一九六二、所收)、參照。

(一〇)「(謝萬)工言論、善屬文。敘漁父・屈原・季主・賈誼・楚老・龔勝・孫登・嵇康四隱四顯爲八賢論。其旨以處者爲優、出者爲劣」(『晉書』謝萬傳)から、「四隱」を漁父・季主・楚老・孫登の四人とする可能性もある。すると結びの二句は「どうしてあの四人の隱士と同じであってよいでしょうか、世に出て來て私の政治に參畫してください」と解釋され、謝萬は出仕する四賢を是と、隱逸する四隱を非としたことから、明帝の詩はやはり韋夏に出仕を求め、むしろ仕官をより強く要求したことになる。だが結びの二句に至るまでの詩の流れから、そうした解釋はやや唐突で強過ぎると感ずる。また『藝文類聚』卷三十六・隱逸(詩題「贈韋居士」)では「詎」字を「儻」字に作り、そうであれば「四隱」は一度でも世に出て來た隱士たちでなくてはならない。あるいは『文苑英華』卷二三二(詩題「招隱士逍遥公韋夏」。韋夏の傳に據る限り、「逍遥公」はこの詩とその返詩のやり取りが行なわれた後の號であり、この詩題は後世の命名に係ろう)では、「四隱」を「四皓」に作る。確かに「詎」字を「儻」字に作るのは『藝文類聚』のみで、『文苑英華』が「四隱」を「商山四皓」として改字した可能性はあるが、こうした點からも、この詩の「四隱」を積極的に『晉書』謝萬傳の「四隱」とはし難い。

(一一) 吉川氏前掲書二八〇頁及び黄惠賢・陳鋒主編『中國俸祿制度史』(武漢大學出版社、一九九六)第三章第四節「北齊北周的俸祿制度」、參照。

(一二)『韓非子』外儲説右上。

(一三) 注(一)所掲。

(一四)『宋書』隱逸傳とそこに表出された沈約の隱逸觀については、神塚淑子「沈約の隱逸思想」(『日本中國學會報』第三十一集、一九七九)、吉川氏前掲書二二五頁など、參照。

(一五) 唐長孺『魏晉南北朝史論捨遺』、中華書局、一九八三、所收。

(一六)「愔謂榮貴曰、僕家世忠臣、輸誠魏室、家亡國破、一至於此。雖曰囚

虜、復何面目見君父之讐。得自縊於一繩、傳首而去、君之惠也」（『北齊書』楊愔傳）、「累遷驃騎大將軍・東徐州刺史。解州還、遂稱老疾、不求仕。齊受禪、追璵兼前將軍、導從於圓丘行禮。璵意不願策名兩朝、雖以宿舊被徵、過事即絶朝請。天保四年卒」（『北齊書』李璵傳）、「周帝見之曰、何不早下。伏流涕而對曰、臣三世蒙齊家衣食、被任如此、革命不能自死、羞見天地。……後主失并州、使開府紇奚永安告急於突厥他鉢略可汗。及聞齊滅、他鉢處永安於吐谷渾使下。永安抗言曰、本國既敗、永安豈惜賤命。欲閉氣自絶、恐天下不知大齊有死節臣。唯乞一刀、以顯示遠近」（『北齊書』傅伏傳）など。

（一七）他に「屬魏孝武西遷、東魏遣侯景率衆寇荊州。寧隨勝奔梁。梁武帝引寧至香磴前、謂之曰、觀卿風表、終至富貴、我當使卿衣錦還鄉。寧答曰、臣世荷魏恩、位爲列將。天長喪亂、本朝傾覆、不能北面逆賊、幸得息肩有道。儻如明詔、欣幸實多。因涕泣横流、梁武爲之動容。在梁二年、勝乃與寧密圖歸計」（『周書』史寧傳）、「屬隋文帝初爲相國、百官皆勸進。熾自以累代受恩、遂不肯署牋。時人高其節。隋文帝踐極、拜太傅、加殊禮、贊拜不名」（『周書』竇熾傳）、「敷少有志操、重然諾。每覽書傳、見忠臣烈士之事、常慨然景慕之。……齊將段孝先率衆五萬來寇、梯衝地道、晝夜攻城。……敷知必陷沒、乃召其衆謂之曰、……守死窮城、非丈夫也。今勝兵之士、猶數百人、欲突圍出戰、死生一決。儻或得免、猶冀生還、受罪闕庭。孰與死於寇乎。吾計決矣、於諸君意何如。衆咸涕泣從命。……敷殊死戰、矢盡、爲孝先所擒。齊人方欲任用之、敷不爲之屈、遂以憂懼卒於鄴」（『周書』楊敷傳）、「（賀拔勝）敗績、遂將麾下數百騎南奔於梁。謙亦與勝俱行。及至梁、每乞師赴援。梁武帝雖不爲出軍、而嘉勝等志節、竝許其還國。乃分謙先還、且通隣好。魏文帝見謙甚悅、謂之曰、卿出萬死之中、投身江外。今得生還本朝、豈非忠貞之報也。太祖素聞謙名、甚禮之」（『周書』崔謙傳）など。

（一八）『禮記』喪服四制「門内之治、恩揜義。門外之治、義斷恩」。

（一九）『周易』繫辭傳上。

（二〇）興味深いのは、『顔氏家訓』歸心篇に「抑又論之。求道者、身計也。惜費者、國謀也。身計國謀、不可兩遂。誠臣徇主而棄親、孝子安家而忘國、各有行也」と見えることである。この認識が顔之推の一生のどの時點で明確になったのか、そして彼の佛教に對する意識とどう連關するのか、他日稿を改めて論じたい。

（二一）清・趙翼『陔餘叢考』卷十七「六朝忠臣無殉節者」などは、南北朝の王朝交替時に王朝を裏切った人間を具に擧げ、彼らに節義の概念は定着せず、宋代以降になってやっと儒學が節義を明らかにしたと論じる。

（二二）松岡榮志「陽休之と祖鴻勲―陶淵明への距離」（大塚漢文學會『中國文化』四八、一九九〇）は、この書簡の陶淵明の影響を論じる。

（二三）小尾氏注（九）所掲書五九八頁、參照。

（二四）注（一）所掲書、注（九）所掲書、及び呉世昌「魏晉風流與私家園林」（『羅音室學術論著』第一卷・文史雜著、中國文藝聯合出版、一九八四、所收）など、參照。

（二五）「避尒朱之難、匿於嵩山」（『北齊書』元韶傳）、「愔以世故未夷、志在潛退、乃謝病、與友人中直侍郎河間邢卲隱於嵩山。及莊帝誅尒朱榮、其從兄侃參贊帷幄。朝廷以其父津爲并州刺史・北道大行臺、愔隨之任。……愔從兄幼卿爲岐州刺史、以直言忤旨見誅。愔聞之悲懼、因哀感發疾、後取急就雁門溫湯療疾。郭秀素害其能、因致書恐之曰、高王欲送卿於帝所。仍勸其逃亡。愔遂棄衣冠於水濱、若自沉者、變易名姓、自稱劉士安、入嵩山、與沙門曇謨徵等屏居削迹。又潛之光州、因東入田横島、以講誦爲業。海隅之士、謂之劉先生。太守王元景陰佑之。神武知愔存、遣愔從兄寶猗齎書慰喻、仍遣光州刺史奚思業令搜訪、以禮發遣。神武見之悅、除太原公開府司馬、轉長史、復授大行臺右丞、封華陰縣侯、遷給事黄門侍郎、妻以庶女」（『北齊書』楊愔傳）、「以天下方

亂、遂解官侍養、隱於林慮山。武定中、文襄徵爲大將軍府功曹」(『北齊書』元文遙傳)。

(二六) 謐不飲酒、好音律、愛樂山水。高尚之情、長而彌固、一遇其賞、悠爾忘歸。

(二七) ただ北朝でも、例えば「性不飲酒、而雅好賓遊。每良辰美景、必招引時彥、宴賞留連、閒以篇什。當時人物、以此重之」(『周書』裴寬傳附弟漢)とあり、自然を鑑賞する態度がある程度の範圍の人々の間で重んじられていたことがうかがえる。

(二八) 呉氏前掲論文は、『洛陽伽藍記』などから、北朝の王公貴族層に自然愛好の精神があったと指摘する。だがその愛好に、南朝が自然を「退隱の場所」とした質素さはなく、むしろ園林の中に高層建築を建てて絢爛豪華に飾ったものであったとも言う。

(二九) 松岡氏前掲論文、參照。

(三〇) 例えば南朝では、隱者の下に大きな學團が形成され、それが當時の知識人層に大きな影響力を有したことを示す記述は、史書に散見される。だが北朝は、もちろん官を去った人間が門徒を抱え、彼らに學を講じて生計を立てていたことはあったであろうが、南朝ほどの大きな知識人層の集團を形成していたかは疑問である。

(三一) 梁使將至、勑鴻勳對客。高祖曾徵至并州、作晉祠記、好事者玩其文。位至高陽太守、在官清素、妻子不免寒餒、時議高之。天保初卒官。

(三二) 「爲賀拔勝荊州開府長史。勝不用其計、棄城奔梁。叔武歸本縣、築室臨陂、優遊自適。世宗降辟書、辭疾不到。天保初復徵、不得已、布裘乘露車至鄴。楊愔往候之、以爲司徒諮議、稱疾不受。肅宗即位、召爲太子中庶子、加銀青光祿大夫。……又願自居平陽、成此謀略。……世祖踐阼、拜儀同三司・都官尚書、出爲合州刺史。武平中、遷太子詹事・右光祿大夫」(『北齊書』盧叔武傳)、「既而樊子鵠爲吏部尚書、其兄義爲揚州刺史、乃以虯爲揚州中從事、加鎮遠將軍。非其好也、並棄官還洛陽。屬天下喪亂、乃退耕於陽城、有終焉之志。大統三年、馮翊王元季海・領軍獨孤信鎮洛陽。于時舊京荒廢、人物罕存、唯有虯在陽城、裴諏在潁川。信等乃俱徵之、以虯爲行臺郎中、諏爲北府屬、並掌文翰。……四年入朝、周文帝欲官之、虯辭母老、乞侍醫藥。周文許焉。又爲獨孤信開府從事中郎。信出鎮隴右、因爲秦州刺史、以虯爲二府司馬」(『北史』柳虯傳)。